

Paradigm Shift

空に手を伸ばして月をつかもうしている弟に、兄が言った。「そんなことしたってダメだよ。月はとても高いところにあるんだ。屋根に上らなくちゃ届くワケないじゃないか」それを聞いていた父親が言った。「さすがは兄貴、いいことを言うもんだ」

月が「とても高いところにある」と考える兄弟と、月を「地球の周りを回る衛星」として理解する我々との間には、考え方の枠組みの違いがある。この枠組みのことを“パラダイム paradigm”という。

では、月と北極星はどちらが明るいだろう。地上から見ると月の方がずっと明るいけれど、恒星である北極星の本来の明るさは桁違いである。ここで月を明るいと考えるか、北極星を明るいと考えるかはパラダイムの違いに他ならない。北極星の明るさを理解するためには、月を明るいと考えるパラダイムから抜け出し、新しい考え方の枠組みを手に入れなければならない。これを“パラダイム・シフト paradigm shift”という。

パラダイムの移行は社会全体で起こることもある。明治維新は、人間の価値を規定する「士農工商」の身分制度を、「四民平等」という全く別のパラダイムに変えた。戦争に勝つことが最優先された社会は、終戦によって、平和が何よりも尊ばれるパラダイムにシフト shift したのだ。

春季大会。真所の準決勝は S 君の強打に苦しむ展開。力比べのようなラリーで打ち負け、ネットプレーもなかなか決まらない。3-4down で迎えたレシーブの第8ゲーム。ここで、真所は（意識していたかどうかはわからないが）チェンジオブペース。ベースラインで相手の仕掛けを待つ戦術。ここから真所のウィナーはほとんどなく、得点は S 君のウィナーとアンフォーストエラー（ミス）によって動いた。見方を変えれば、真所は何もせず、来たボールをただ丹念に打ち返していたのだ。デュースが繰り返され、S 君のダブルフォルトにも助けられて、真所は何とかこのゲームをブレイク、4-4 にした。泥臭い辛抱によって、流れは真所に傾きつつあった。そして迎えたサービスの第9ゲーム。真所は一転サーブアンドボレーに出た。きれいに決めて 15-0。次もサーブでネットに詰めて、今度はミス。次も同じく詰めてボレーミス。再び流れが変わろうとしていた。

ここで、ボレーの精度やサーブの質を反省し、技術の向上に努めようという考え方を否定しようとは思わない。「ラケットの振り方が巧くなれば強くなる」というパラダイムでは、それは紛れもない真実なのである。しかし、これでは屋根に上って月をつかもうとする兄弟と何ら違いはない。せつかくの有利な流れの中で、敢えてペースを変えてネットに詰めることがどれほど不合理であるかは、もう一つ別のパラダイムの中でしか理解できないはずである。勇敢にも真所はもう一度流れを引き戻し、こんどはその流れを決して相手に渡さなかった。陸との決勝に駒を進めたのである。Good job ! 「よい流れは変えてはならない」チェンジオブペースを理解するパラダイムでは戦術に迷う余地もないのだ。

